

シノドスへの歩み みことばと共に 復活節第四主日C年

小西広志

2022年5月8日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年5月8日、復活節第4主日となっています。今日の三つの朗読の箇所をシノドスの教会の観点から読んで味わってみましょう。

主の言葉

第一朗読では48節以下に登場する「主の言葉」にこころを留めてください。「異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。……こうして、主の言葉はその地方全体に広まった」(使13章48-49節)。パウロたちが伝えた「主の言葉」とは、文字通りイエスさまが語られた言葉を伝えただけではありません。むしろ、イエスさまの受難、死、復活の出来事を伝えたのです。つまり、イエスさまによってなされた救いの出来事を「主の言葉」として伝えたのです。46節にある「永遠の命」という表現もここに刻んでほしいです。「主の言葉」は「永遠の命」と関係します。ユダヤ人たちはパウロの説く「主の言葉」を拒否し、「永遠の命」に値しないものとなってしまいました。反対に異邦人たちは「主の言葉」を受け入れて「永遠の命」へと向けられて歩み始めます。この歩みを信仰と呼んでいいでしょう。「主の言葉」を聞く、耳を傾けるが信仰には必要なことです。

大きな苦難を通過して来た者

第二朗読にある「大きな苦難を通過して来た者」(黙7章14b節)はこころにしみる表現です。なぜなら、これは神さまの救いを信じて、苦しい今を生きぬくキリスト者たちそのものを指すからです。つまり、わたしたちを指している表現です。「幕屋を張る」(15節)は、苦しみの中でキリストの死に結ばれたキリスト者たちの群れの中に神さまは幕屋を張り、そこにご自分の居場所を定め、いつもおられるのです。17節の「神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである」は希望にあふれる表現ではないでしょうか。キリスト者たちが直面する苦しみ、その苦しみからの解放は神さまの力、恵みによるのです。もはや自分たちの力では苦しみから解放されないということをよく知っているのがキリスト者であるわたしたちの生きる姿勢なのです。

永遠の命

福音朗読でイエスさまは「わたしは彼らに永遠の命を与える」(28節)とおっしゃいます。そして、第一朗読でも「永遠の命」は登場します。「自分自身を永遠の命に値しない者にしている」(使13章46節)。「永遠の命」とはいったい何でしょうか。父なる神さまとの深く、豊かな関わりあい「永遠の命」です。ですから、すべての被造物は神さまとの交わりの中で生かされていくとき「永遠の命」を生きるのです。ペトロたちは、すべての人が「永遠の命」に招かれていると考えていました。ただし、条件は「主の言葉」に耳を傾けることです。イエスさまもちろん「永遠の命を与える」とおっしゃって、わたしたちを招きます。なぜなら、イエスさまご自身が「命の水の泉へ導く」(黙7章17節)牧者だからです。なぜ、イエスさまはこれほどまでにわたしたちに「永遠の命」を与えようとなさるのでしょうか。福音朗読の最後の言葉がヒントを与えてくれます。「わたしと父とは一つである」(ヨハ10章30節)。父なる神さまとイエスさまは一つに結ばれています。その密接なつながりを羊であるわたしたちにもイエスさまは体験してほしいと願っています。しかし、わたしたちが直接、父なる神さまと一つになることはありません。わたしたちが、イエスさまとの密接なつながりであれば、イエスさまが父なる神さまと一つなのですから、わたしたちは父なる神さまとイエスさまを通して一つにさせていただけるのです。こうして、イエスさまが永遠の命を生きただように、わたしたちもイエスさまのおかげで父なる神さまから永遠の命をいただき、父なる神さまと一緒に生きていけるようになるのです。

まとめ

今日の福音の最後のことばに注目してみてください。「わたしと父は一つである」(ヨハ10章30節)。なにげない一文かもしれませんが、よく味わってみると、少し難しいように思います。「一つである」とはいったいどういう状態を指すのでしょうか。

どんな宗教であれ、どんな信仰であれ、人間を超えた何かと一つになる、合一することを求めます。一つになることは信仰だけに限りません。人は誰かと、あるいは何かと一つになることを切望しています。だから、それがかなわなかったとき、人はとても傷つき、落胆するのです。「傷つけられた」、「裏切られた」とつぶやくのは、一つになりたいという希望があるからです。お互いにわかり合いたいという願いがあるからです。

しかし、実際の生活では一つになるということは滅多にないことです。恋人同士が、夫婦が、家族が、一つになることはなかなかありません。学校のクラスが、会社が、地域が一つになることは滅多にありません。ただ、一度でも一つになったという体験があれば、人はその体験を頼りに生きていけるのではないのでしょうか。

教会は一つになるどころです。しかし、その一つとは自分の個性を消していくことではありません。自分自身の個性を保ちつつ、それでも一つというようなのが本当の一つになることだと思います。教会の行事、パズーでもいいですが、一体感を味わうことはあります。しかし、それは一体感であって、一つになったというものではないです。

例えば、ミサの中で皆と一緒に聖歌を歌います。あるいは祈りを唱えます。時々、子どもたちの声が響くことがあります。大人の声とは違う、少し甲高い、少し張りのある声です。わたしは、その声があるおかげで一

つであることの実感します。いろいろな方が集まって一つになってミサを祝っている、神さまを賛美している、感謝しているが様子がよく現れます。司式をしていてとてもうれしいです。

一つになるとは全体に対して自分自身を消し去っていくことではありません。逆に全体に対してことさら自分を主張していくことでもありません。ハーモニーとでもいったらよいでしょうか、調和があって一つなのです。

本当の意味での一つになる体験、そして、深く豊かな一つになる体験ができるのが教会なのです。

それではまた来週